

ここに帰る

和田重正に学ぶ会

題字 和田重正

ここに帰る

第七十九号

令和五年十月一日発行

目次

『掲示板』	昭和三十五年四月十日	和田重正	2
『掲示板』	昭和三十五年四月十七日	和田重正	2
『掲示板』	昭和三十五年四月二十四日	和田重正	9
『ま子』	昭和四十八年一月号		19
白い杖 やま 1 不二によつて 姿勢を正す		和田重正	19
『ま子』	昭和三十五年四月十日	和田重正	24
『ま子』	昭和三十五年四月十七日	和田重正	37
『ま子』	昭和三十五年四月二十四日	和田重正	37
『ま子』	昭和三十五年五月一日	和田重正	42
『ま子』	昭和三十五年五月八日	和田重正	44

44

42

37 37

24

19

19

9

2

2

後記

不生靈明

和田重正

『ま子』 昭和四十八年二月号

白い杖 目を開くのは誰だろう

やま 2 自然をみつけよう

和田重正

(手書き定題)

表紙写真

木曾山脈 濃ヶ池

長野県 宮田村

撮影 平清正義



四月八日の花まつり（お釈迦さまの誕生日）にちなんで「天上天下唯我独尊」の話をした。

ところが、これは人間の自覚に関することなので自然話がだいぶ理屈っぽくなってしまつて、あとで考えると子どもにはピンと来ない話だったように思う。それで、そんなわからない話を書いてもつまらないからこの度は書くことをやめにする。



日曜の話 四月十七日

和田重正

もしあなたが、おじさんから明日来たらばお小遣い千円あげると言われたとすると、あなたはよろこ

んで日頃欲しいと思つていたものを貰う計画を立て、翌日おじさんのところへいそぐと出かけるであろう。ところが、そのおじさんはちょっと変な癖があつて、あなたが差し出した手に九百円しかのせてくれなかつたとしたら、あなたはどんな気がするだろう。「なあーんだ」と思わないだろうか。その次には「ケチな人だなあ」と思い、おじさんから自分が反対に百円ゴマかしてとられたような、うらめしい気持ちがないだろうか。「そんならはじめから千円やるなんて言わなければいいのに」と愚痴をこぼしたくなるだろう。そんな気持ちになるのは当たり前だ。

そうするとあなたのおじさんはあなたをよろこばせようとして九百円も出しておきながら、ちょっとケチをしたために、却つてあなたを不愉快な目にあわせ、感謝される代わりに軽蔑される結果になつてゐる。しかもおじさん自身では九百円やったのだから、よほど感謝されるべきだと思ひ、いい気持ちになつてゐるだろう。もしあなたが少しでも不平らしい顔をしたらば、それこそ意外に思ひとんでもない

奴だと思つて違ひない。しかしそれは人情を知らな
いための間違ひである。人に対する親切はそんなも
のだ。本当に相手を満足させようと思つたらば、つ
まり親切といえるほどの親切をするつもりなら、決
して九分や九分五厘の半端な親切をすべきでない。
一分や五厘の出しおしみのために、折角の九分の親
切が無くなるばかりでなく、却つて軽蔑と恨みを受
ける原因となつてしまふ。

それは人に対する親切ばかりではない。仕事でも
同じことだ。掃除をするのに敷居の隅にほこりが残
つていたり、茶碗を洗うのに、タマゴのよこれがう
すくつていたりしたら、折角のそこまでの仕事は
認められないで、「なんだ、誠意のない奴だ」と軽蔑
されてしまふ。もし、その座敷へお客さんを招いた
りその茶碗でお客さんにご飯をあげたりして、お客
さんに不快を与えてもしたらば、軽蔑どころか「な
んという奴だろう」と恨まれることにさへなる。

では、ホコリを残したり、タマゴのヨゴレをつけ
ておいたりする人は、そうしてやろうと思つてする

のかというところではない。その人としては普通に
やったつもりでいるのだらう。ただそこまで心が行
き届かなかつただけなのだ。しかし、そんなことに
行き届かないような心のはたらきでいいのだらうか。
そんな人間は役に立たないから人から信頼されるこ
とはできない。みんなは、役に立つだけの行き届い
た心をもつようにならなければならぬ。そのため
には、もう一つこんなことを知る必要がある。

自分がこれで十分だと思つただけでは必ず足りない。
それではせいぜい九分にしかなつていないものだ。
本当に役に立ち、人から信頼されるだけのことをし
ようと思つたら、もう二分だけ即ち十二分だと自分
が思つただけのことをしなければならぬ。それでは
じめて誠意のある仕事だと認められるものだ。こう
いうことをしっかりと心に銘じておくことは、立派
な人になるためにどれほど助けになるかしのれない。
いま言ったことは勉強についても同じである。

自分で、まあこの位と思つ程度にやっていたので
は駄目だ。自分では、この位と思つてから、まだぬ

かっているところはないかと思つて見直すと丁度よい加減のところになる。或いは試験勉強だったら、今日は二十ページやろうと予定したとき、二十五ページやるようにすると丁度いい加減になるものだ。試験に間違いなく勝てる人は、そういう要領を知っている人である。わたしは小さいとき勉強ができなかったが十五のときこんなことに気がついたために、頭がよくなったのでないのその後、どんな試験でも必ず合格するようになったのだ。だから、今わたしが言っていることは本当のことであり、またすばらしく大切なことなのだ。

もう一つ付け加えておこう。

「百里の道も九十九里を半ばなかと思え」ということばがあるが全くその通りで、勉強でも仕事でも、他人への親切でも、九分や九分五厘までは大ていの人はやるものだが最後の一分か五厘ぐらいのところをピチッとやり遂げる人が少ない。それは最後の一分か五厘のところを残りなくやり遂げる努力は、それまでの九分か九分五厘に匹敵するほど大きいものである。

るからだ。また、それだけに十分な完成というものは貴いのである。

この話をみんなが本心に心に留めてくれることをわたしは心の底から祈りたいような気持ちである。

これを知ってくれさえすればあなたは、遊びにも勉強にも仕事にも、逃げ腰や不安におじたケチな態度でなく、集中的なスカツとした本心に能率のよい生活ができるようになるのだから。

おとなのページ

投稿歓迎 どなたでも なんでも いつでも

実 感

この前の号に「創造的的人生」ということを夢の中の友だちから聞かされて、大変愉快になった話を書きましたが、わたしはその後、このことばに関連しているようなことに気がついてきました。

まず「創造的人生」を別の言葉で言えば「実感に生きる人生」とも言えることに気づきました。われ／＼は、五官を働かし、心を働かして、事物の実状をとらえて感じとったところに従って生きていくように思っていますが、実際によく考えてみると必ずしもそうでないことがわかります。事物による実感でなく、自分の心の中にできている観念によって行動していることが意外に多いのではないのでしょうか。小さい子どもは花を見れば「キレイ」と言いますが、恐らく実感から発せられることは少ないと思います。親や大きい子どもたちから花は「キレイ」と教えられてきたので花ささえ見れば反射的に「キレイ」と言うだけのことが多いと思います。それと同じように内容の伴わない言葉を使い、またその言葉を実行にかえていくことがわれわれ大人の日常生活の中でも非常に多い。むしろ生活の大部分がそのような空虚な行動ではないでしょうか。

こういう実感を離れた観念（妄想）によって動かされる生活はまことに生命感に欠けています。生き

甲斐などは感じられる道理がありません。

だから、そういう実感によらない生活を多くして
いる人は自分が生きていることを確認するために何かに強い刺激を求めたくなります。飲む、打つ、買うの類いです。もし体力が弱かったりその他の原因で強い刺激を追うことができなくなったときは実に淋しい退屈な日々になってしまいます。

大体マスプロ時代になるとそれに従事する人はよほど自分で工夫をしないと活字みたいな人間になってしまいます。多くの役人や会社員など、サラリーマンという人がマージャンだのパチンコ、競輪その他、世にもくだらないことに、なげなしの精力と金と時間を浪費しないでいられないのは、自己を活字化しなければならぬ仕事上の性質上無理からぬことだともいえます。まだ、年がら年中仕事に追われて我にかえることのない活動家は退屈はしません、これも多くは碁でいう「形で打つ」とか「手拍子で打つ」ような生活になって、実感を離れてしまっているという点ではやはり酔生夢死になりやすいよう

です。そういう人がどんなにハデな大きな仕事をしても、犬が珍しい芸当をやったのけたのとあまり違いがありません。まことに気の毒なことです。

実感によって生きる人には、あらゆる瞬間が創造ですから退屈というようなことはあり得ません。石ころ一つ、木のきれっぱじ一つにも生命的な刺戟を覚えます。だから、別に不健全な刺戟を求める必要はありません。

まだ固着観念が少なく、大体実感で行動している幼少年には決して退屈はありません。退屈とか味気なさという不幸に見舞われるのは、事物を観念にすり換えてしまつて、何事にも感動を受けなくなる青年期に入つてからの現象です。この時分が一番生意気で、そのくせ腹の底に不安をかくしている時代です。二十代三十代の頃のこと。

こういうことから考えると、昔軍人が退役すると、ひどく退屈する人が多かったのは軍人というものもあまり実感的な生活をしていない人が多かったことが想像されます。

わたしは二十七歳のとき「実感に生きる」ということを少し知りました。（これは、「自己に忠実に生きる」とも「ありのままに生きる」とも言い換えることができます。）それと同時に、どんなところに居ても、どんなに孤独であつても絶対退屈はしないようになりました。またその時から、花や草や山や川や星や虫や獣や人間や石やミミズの美しさを一番深い味わいで知るようになりました。そして、人間として生まれて、これほど幸福なことはないと思ひました。

ですから、わたしは子どもたちに、なんとかして、実感による生活、倦むことのない生活を失わせぬよう、失つたものは取り戻させるように導きたいと思つていきます。

（学校その他で行われる教育は全部実感を離れて観念に従うように訓練していますから、それだけにまかせておけば酔生夢死の活字的な人間にしてしまいます。これは大きな不幸です。が、今日の文明はそれを極端に要求しているのですから現代に生きるた

めにはそういう教育を受けることも、やむを得ないでしょう。だからこそ、少しでも我に返って自分の人生、実感による自主的な、目を覚ました生活を、取り戻して現代から受けなければならぬ人間の不幸に打ち克てるようにしてあげたいのです。」

実感とか、創造的の人生とか、我に返る、自主的、目を覚ました、ありのままの、とかいうわたしの言葉を理解することのできない人は「そんなことをしたら子どもたちは勉強ができなくなりはないか」と心配するかもしれないが事実は反対です。もし子どもが実感を尚^{とうと}ぶ^ぶことを知ったらば精神は解放されその活動は活発となり、記憶力も理解力も飛躍的に強く、悠々としてしかもガツチリとぬかりのない勉強ができるようになります。空論ではなく実証済みの事実です。



父母の会新役員

四月二十日、あいにくの大雨でしたがご出席くださった十四名の会員の方々によって新学年の役員が選任されました。(人名・略)

この度役員になってくださった方々はどなたもお忙しい方々ばかりで、大変ご無理をお願いしたわけでもことに申し訳ないことでした。会員の皆様もどうかこの辺のところをお含み置きくださってご協力願いたいと存じます。

本会の席上、塾長から左の話がありました。

一、中学年にグループ勉強の時間が決めているのは、その時間だけ来ればよい、というのではなく、少なくともその時間には出席するように、という

意味である。

本来、はじめ塾では個人々々について、自由な学課を自由な速度で指導するのが本体で、グループの方はむしろ補充のつもりである。反対に理解されては効果が上がらない。

二、十河信二さん（国鉄総裁）が五月十五日に塾に來られることになっている。

その日には塾生はもちろん卒業生も集まってお話を聴くとよいと思っている。父母の会の会員方もなるべくおいでになっていただきたい。

「国鉄総裁」としてでなく、「十河信二さん」という稀代の大人物の声をじかに塾関係の人全部に聴いてもらいたい。

「はじめ塾」運営組合

この機会に、はじめ塾がどんな組織によって運営されているかを、新しい方のために略記しておきます。

一、まず現在の塾の建物は、はじめ塾建設委員会（人名・略）の事業として計画され、昭和三十一年四

月から三年計画で約百六十人の有志が資金の積み立てを行い、予定通り昨年四月に設計工事の依頼を完了、七月十一日に着工して、予定日に一日のくるといもなく九月十日に竣工しました。

醸金を大別すると

・塾関係者（卒業生、当時の塾生及びその父兄）
・後援者（直接塾とは関係のない人）

になります。卒業生や塾生は大部分が学生であるため、月五十円とか百円ずつをある期間寄付するとか、一時に三百円位の寄付をした人もあるという程度で（中にはアルバイトをして得た千円をそのまま寄付してくれた高校生もあります）資金の八・九割少数卒業生の父兄と、直接塾に関係のない後援者による一口一萬円の醸金でできました。

これこそ全く何等求むるところのない文字通りの浄財ばかりでした。これらの人々の中には全く思いがけぬ方も数多く含まれています。例えば、十字町のお医者さんの田中先生、飯泉観音の峯大僧正などの方々です。またお目にかかってお礼を申

し上げる機会のない未知の方もあります。

そしてこの建築は、関係した大工さんはじめ全ての人々の献身的な奉仕によって、大変な安値でもかも至れり尽くせりの行き届いたものになりました。

世にもめずらしい善意と好意のかたまりのようなものが出来上がったわけです。

二、さて、この出来上がったものを活用し、維持していくのに、その主体として社団法人を設立する予定でしたが、条件がととのわなため当分法人の設立は不可能であることがわかりましたので、機が熟するまで民法上の組合を作り、この組合によって経営されることになりました。それで、醸金者の中から有志を募り四十七人の方に組合員となっていたら、この組合の共有者となり且つ、はじめ塾の運営をお願いすることになりました。

称して「はじめ塾運営組合」

(役員名・省略)

任期は昭和三十六年九月三十日まで。

三、右のように、はじめ塾は、三十年の歴史を持ちながら、今ようやく舞台ができて活動を開始したばかりで、本来の目的のためにはまだまだ軌道に乗ったとは言えません。「はじめ塾趣意書」に記されている通りこれから本格的活動をはじめなければならぬことが沢山あります。

どうか、現在の「勉強屋さん」の面だけをご覧にならず、もっと広い意味の教育活動を目論んでいられるはじめ塾に積極的に関心を寄せていただけたらわれわれは有り難い同士として双手をあげて歓迎いたします。

塾生諸君

新学年のゴタ／＼もおさまって落ち着いて勉強ができるようになってきた。塾の様子も大体のみ込めたと思ふ。

はじめ塾は要するに、みんなが、楽しく能率よく

勉強できるようにつくられているのだから、他の人の迷惑にならない限り、自分に一番都合のよい方法で利用すればよい。

たとえば、学校の帰りに来る人でおなかがすいて困る人は申し出てくれればおやつを用意してあげる。泊まりたい人はいつ泊まってもよいし、時間割の都合のわるい人は相談してくればよい方法も考えつくだろう。志を立てて特別な勉強をしたい人にはできるだけだけのことをしてあげる。

ともかく勉強は他人がしてくれるのではなく自分がしなければならぬのだからボヤクしていかないでしっかりやろう！

◎ 「漢字クラブ」にはいれ / / /

◇小学生と中学一年生で国語があまり好きでない人は必ずはいろう。

◇中学二・三年生でも忠実に実行しようと思うものははいるとよい。

◇このクラブに入った人は漢字練習帳（小学生用の

一冊十円ぐらいの帳面）を買って、それに毎日一ページずつ漢字を正確に、ていねいに書いて塾に来るたびに見せる。これを必ず実行する。

◇十五日間続いて完全に実行した人にはごほうびをあげる。

日曜の話 四月二十四日

和田重正

そのこの階段の南側の部屋には三人の男の子が住んでいる。

先週の日曜日に自分の家へ帰った一人の子が、マンガの本を沢山持ってきた。そして、もう一人の子と二人でそれを楽しそうに見ているので、他の一人の子が、

「ボクにも見せて」

と言うと、マンガを持ってきた子が、

「いやだヨ」

と答えて知らん顔をしている。

「いいじゃないか……見せてヨ」

「そんならボクの弁当箱洗ってこい。そしたら見せてやる」

「うん」

というわけで、早速その年上の子の弁当箱を持って台所に降りて行き、それを洗って二階に却って来てめでたくマンガにありついた。

事柄は、ただこれだけのことなのだから恐らく当事者たちはとくに忘れてしまっているだろう。

ところがこのいきさつを見ていたのか聞いていたのかしらないがとにかくとなりの室の上級生がそれを知って口惜しがっていたというのである。

「なんで意気地なしなんだ。マンガ見せてもらうために人の弁当箱を洗う馬鹿がどこにある。三べんまわってワンといえ。一円やる」といわれて本当に三べんまわってワンと行って手を出すのと同じことだ。そんなに馬鹿にされてまでマンガが見たいのかなあ。意気地のないヤツだ」

というわけである。

わたしはこの話をずっとたってからきいたのだが、おもしろい話だと思った。

ここにいるあなたたちだったら、どうすると思う？

「そんなマンガ見せてもらわないよ。そんなもの見てやるもんか」と言いたくなる人もあるだろう。

また、この話のように弁当箱を洗って見せてもらう人も中にはあるかもしれない。

この話はあんまり面白いので、実は金塾生に、「君（あなた）だったらどうする」というアンケートを出して答えてもらおうかと思ったくらいだ。一体、小中学生ぐらいの時代にはこんな場合、どんな反応を起こすのが普通なのか、をわたしは知りたいのである。

わたしは小さいときから、こんな場合は必ず「ふざけるな。そんなマンガ誰が見てやるもんか」と角をかどを立てる性格なので憤慨した上級生の気持ちはよく分かる。いや、弁当箱を洗わしたのは意地悪ではなく軽い冗談であることがその子にも分かっているので、

そのことに對して憤慨したというよりも、むしろ、おめく〜と洗いに行った年下の子の腑甲斐ふがいなきや卑屈はがゆな態度を齒痒はがゆがったという方が当たっていろいろ。そしてその気持もわたしにはよく分かる。だが、しかしわたしはそんなことを腑甲斐ないとか意気地がないとか感ずる心は狭いものだと思う。たとえ相手に多少の悪意のある場合であっても、それにひっかからず、スラリとそらして、もう一棹大きな心でフワリとユーモラスに受け止められる余裕がなければダメだと思う。だからわたしは自分のすぐ角を立てるケチな意地っ張りをどうかして直したいと昔から努力しているが、いまだに脱け切れないで困っている。

大体「男の意地」など大それた立派そうに言うけれどもわたしはそんなものは女の「フテ腐れ」と同質の実にくだらないケチな根性だと思わない。

「恥を知れ」ということは大切なことだがそれはこんなケチなことに腹を立て社会生活を不愉快にせよということではない。

さて、わたしはこの話を聞いたときに「まあ、な

んというユーモラスな、ゆとりのある愛すべき態度だろう」と思って、実にほほえましく感したのである。わたしが三十五年も努力しても至り得ないで居る明るい、ゆったりとした境地（心もち）にこの子は生まれながらにして安住している。恵まれた性格を持っているものだと不思議なほどに感ずっているわけである。ついでに、この話の中にはもう一つの大らかな教訓があることを指摘しておこう。

それは「マンガを見せてやらない」と言った側に ついてである。

これは決して本気の意地悪を言ったのではないし、弁当箱を洗ってきたら見せてやると言うのも、まさか、相手が本当にそれを実行するとは思わず、冗談半分に言ったことに違いない。なるほど冗談としてはセンスのいい方ではない。しかし社会性のかなり未熟な少年としてはまずこんなところだろう。だから別段責められるべきことではないと思う。

ところが、相手が本当に弁当箱を持って階下へ降りていこうとしたとき、それを知らん顔してさせて

しまつては、最初の意思に反して、結果としては、ずいぶんたちの悪い意地悪を実行したことになってしまふ。自分では、初めからそんな意地悪や侮辱をするつもりは毛頭ないものだから、気付かないけれども冗談やからかいというものは度をすぎすと思いがけない結果を招くものだということを知らなければならぬ。こういうことを心得ていないと、自分では何も悪いことをしていないつもりなのに、人から大変嫌われる結果を生ずる場合がある。世の中には、よくさういう失敗をする、気の毒な人があるものだ。

「またもし、相手があっさりと実行してしまつたので、「しめく、思わぬヨロクだ」などとほくそ笑むようだったら、これは言語道断のきたなさである。この話の場合にはそんな馬鹿々々しいことはあり得ないけれども一般にはよくあることだ。

「百円の値打ちのものを冗談に千円と言つたら相手がお人好しだったので、あっせりと「買いますよ」と出た。そこで「しめたッ」と九百円のヨロクをし

て快しとするようなものだ。

それではあんまりにきたない。紳士の取引はもつと正々堂々としていなければならない。

おとなのページ 投稿歓迎 どなたでも なんでも いつでも

欠点

イタについた欠点は

自分にはわからない

先日うちの子が他の子に、どんなことだったか忘れましたが、大変意地の悪いことを言ったのを聞いて、わたしは家内に、

「あの子はなんて意地の悪いことを言うのだろう。どうしてあんな意地の悪いことを言つたり、したりする子がうちにできたのだろう。ふしぎだなあ」と嘆声を洩らしました。

すると家内が即座に、ここぞとばかり勢い込んで

言うのです。

「それは不思議じゃありませんわ。お父さんがそんなんですもの。わたしは今だから言いますけれど、およめに来た当座、なんて意地のわるい人なんだろうと思って、どんなに歯を喰いしばってこらえたか、今考えてもよくがまんして来たものだと思うくらいですわ。それにおじいさんはすぐ意地がわるいでしょう。お二人に毎日やられて…、おじいさんはめずらしい意地のわるい方ですわね。そうお思いになりませんか？」

「ううむ？」

わたしは父の意地悪さを少しは感じたことはありますが、取り立てて言うほどとは思っていなかったので、不意の質問に答えようがないのです。それより自分が意地悪だと真っ向から言われて、わたしは坐っている座布団が抜け落ちて支えないどこか深いところへ落ちて行くような感じにとらわれているところだったので、なんともまともな受け答えができません。

すると、家内は、たたみかけて言うのです。

「お父さんのいじのわるいことやおじいさんのいじのわるいことは、子どもたちもみんなよく言ってますわ」

と子どもたちを証人として、われ／＼父子の意地悪さをいよ／＼はつきりと立証してしまいました。

こうなるとわたしには一句の抗弁もできません。言い訳をする気力など全く消え失せてしまっています。そのときのわたしの心の中をもし漫画に書いたら、大きな？が体中一杯になってそのまま底なしの井戸の中へ落ちていくという絵になったでしょう。

わたしは近頃これほど大きなショックを受けたことはありません。

昔からわたしは、いじわるというのは人間のケチ臭さの陰険なあらわれで、不徳の最大なものの一つだと考えているし、若い人や子どもたちにも、いつもそう言って来たのに、自分こそ正にその不徳の張本人であると今、しかも最も信頼すべき自分の妻にズバリと指摘されたのですから、わたしがどんなに

あわてたか、いやあわてる余裕もないと言った方が正しいでしょう。どんなに茫然、呆然としたか他人には想像もつかないかもしれません。

わたしは「うん」と言ったきり、しばらく声も出ませんでした。何の判断も出てきません。

そのうちに、一番先に心に浮かんできたのは「意地悪な人間が三十年も塾をやって来たのか」ということと「知らずにしたことはいいながら、家内をなんと気の毒な目にあわせてきたことだろう」という鉛のような思いです。まことに「慚愧ざんき」ということばは、この時のわたしの心情をあらわすために用意されていたように思います。

四・五日たって、ようやく落ち着きを取り戻しかかったとき「意地悪な人間は塾をやる資格がない」とすると、意地悪を直すか塾をやめるか」と思いました。

こんなとき誰でも考えるように、わたしも意地悪を直す方の道を考えました。これが向上の道だからです。だが「直せるだろうか」と自ら問うたときに「見込みなし」と即座に応答があります。

わたしは自分が特別な意地悪だとは夢にも思っていなかったのです。だから、どこをどう直したらよいか全く見当がつかないわけです。直そうにも、直すための標準になる定規や物差しがそもく曲がっているらしいのですから、どうにも仕様がありません。

自分の意地悪さについて全くの無自覚なほどですから、家内が口を極めて言うほどの父の意地悪さもわたしにはよく分からないのです。

この際自分はどうすればいいのだろう。

だけど、結局わたしは三十年もやって来て、またこれからも一生涯しようと思ってきた塾を、たとえどんなに良心に恥じることであっても、やめることはできません。それは、もっと大きな意味で世を裏切ることになるからです。

では塾をやめることも意地悪を直すことも、どちらもできないならどうすればいいのでしょうか。唯一つ、哀しい気持で、それでも、塾をやっていく道より他ありません。まことに宿命的な悲劇を感じます。が致し方ありません。

この自分のどうすることもできない欠点によって害なわれる青少年があるとしても、わたしはただ済まないと深く詫びながら、それでも、先生として接してゆくよりとるべき道がないのです。

まあこれは主としてわたし一個の内面的な問題として止まりましたが、この経験からわたしはこんなことをつくづくと感じています。

自分の本当の欠点というものは自分では分からな
いものだということ。自分でケチだと知っている
る人のケチはたいしたものではありません。ケチと
自分が一体になっているほどイタについてケチにな
ると、いくら人から、「お前はケチな奴だ」と言われ
てもそう思えないもののようにです。こういう実例は
現にわたしの身近にもあります。それから考えると、
わたしの意地悪はよほどイタについてたもののように
です。

わたしは数年前にある極めて親しい人から「身び
いき」だと痛烈に言われたことがあります。そのと
きわたしは、その批判に対して、何も弁解も抗弁も

しませんでした。が自分の内心ではそれに対する十分
な釈明が成り立っていました。ただ、その批判者が、
客観情勢の誤認のためわたしの本位を理解してくれ
ないだけだと思っていました。だからそのときの「身
びいき」という欠点は客観的に計量することができ
ました。

ところが、この度の意地悪に至っては、全くわた
しという人間と不離不可分になっているとみえて、
どうにも計量の仕様ががないのです。

お殿様で育った人には、社会人として一番大切な
社会性について他から痛烈な批判を受ける機会がな
かったので、自分のお殿様ぶりがわからないよう
です。親でも、おじいさん、おばあさんでも、女中さ
んでも、先生でも誰でもみんな自分には負けてくれ
るものと思ひ込んでいます。そういう人には反省力と
いうものがなく、みな他人がわるいのだし、人から
負かされるということは言語道断なことだと感じて
います。その人にとっては、世の中は自分のために
つくられていなければならぬのです。この非社会

性は赤ん坊のときから養われて来ているのでその人と一体不可分になっています。ですから反省できないし、他から指摘されても自分の異常を認めることができないのです。

こんなことを考えると、本当の欠点というものは、自分でなおすことは殆ど不可能なように思えてきます。それに似たのは親が我が子の欠点を直すことのむずかしさです。それは難中の至難事です。わたしはつくづくそう思っています。

親と子はずいぶんちがうように見えてもよくよく観察すると性格の基本のところでは非常によく似たものをもっているものです。よい面でもわるい面でもよく注意してみると我が子の中に自分の姿を見る思いがするものです。ところが、もっと共通性の度合いが高い場合には、それに気付くことさえない場合が多いのではないのでしょうか。自分に全くイタについてしまっている性質は自分自身には分からないのと同様です。そして、もし他からの忠告や批判によって気付いたとしても、それを直すことは全く困難

なことです。

だから、我が子のそうした本当の欠点を直そうと思うなら、誰か別の人に頼るより仕方がないのではないのでしょうか。ところが他人に頼って直そうとする場合でも、その親がよほど謙虚な心持ちでなければ効果を上げることはできません。

多くの場合、その子の最大の欠点は、親は本当には知らないものです。

わたしは毎年何人かのお子さんと個人的な知り合いになります。そして長い間観察してみると、子どもの本当の欠点（長所も）を知っている親は比較的少ないような気がします。

もしわれわれが親に向かってその子の一番の欠点を思った通りズバリと言ったら、その親は大ていの場合、わたしが家内から「意地が悪い」と言われたときと同じように「え？まさか」と思われるに違いありません。

事実多くのお母さんは、我が子について語るとき、ケチをおおらか、厚顔しいを引っ込み思案、乱暴を

おとなしい、不正直を正直、強情を素直と、言葉の間違えていっているのではないかと思われるほど正反対に見ています。こんな場合に他人がいくら本当のことを指摘しても、ただ気分を悪くするだけで何の役にも立ちません。

本当にむずかしいことです。

親にも本人にも気付きにくい根本的な欠点はどうしたら矯正されるでしょうか。それは救うべからざる宿命であるとあきらめなければならぬのでしょうか。

わたしは必ずしもそうとは思いません。むずかしいことかもしれませんが、三つの大きな方法があると思います。

一、宗教によって神とか仏とかに自分を投げかけて行く道

二、坐禅の道（註：これは宗教ではない）

三、無遠慮に、痛烈に批判し合う同輩とぶつかり合う生活をする。但し、その生活から逃避できないことが条件

この三つの方法によれば、自分で欠点を自覚したり直そうと努力したりしなくとも自然に改善されます。却って、欠点を直す目的でそういうことをするのは本末転倒で無意味です。また、この三つを同時に行えば理想的ですが、一つでも二つでも実行していればだんだん改善されていくことは確実です。

わたしも意地悪やその他、自分の気付いたり気付かなかつたりするいろ／＼な欠点が消えて行くように、一と二の道を一層はげみたいと思っています。三の道はもはやわたしにはひらかれていませんので。

（三月二十五日 和田）

◎きまりは実行しよう◎

勉強室に「コンチワー」といいながらぶらぶらりと入ってくる人がまだいくらかある。

「右足で入って正しく坐って礼をする」というきまりになっているのだから、これは誰でも実行しなければいけない。

まみず

昭和四十八年
一月号

自明の理

白い杖
24

医学のために人間があるのではない。まして医者のために患者があるのではない。産業のために人間があるのではない。まして事業家のために働き手があるのではない。教育のために人間があるのではない。まして教師のために児童生徒があるのではない。宗教のために人間があるのではない。まして宗教家や宗教結社のために信者があるのではない。政治のために人間があるのではない。まして政治家や政党のために庶民があるのではない。それらはすべて人間のためにあるのだ。

やま
1

不二によって
姿勢を正す

和田 重正

かえり
顧みるとわれわれは三、四十年の短い間にもずいぶん思いがけない変化を経験してきました。

(小田原はじめ塾)

人類進化の先頭に立っていると
自他共に許す文明国の人々が、人間の名誉も尊厳も何も打ち忘れてひたすら只管に殺し合いに没頭し、——
と言いたいが、大部分の人々は名誉や尊厳どころかすべての自由や、生命さえも無視され、殺し合いの

坩堝るつぽの中に叩き込まれた、という方が正しいでしょうが——あの地獄絵を上演したのはまだ三十年ほど前のことです。

あの戦争は人類全体にとっても、われわれ個人個人にとっても大へんな出来事でした。

ようやく戦争が終わってホッとひと息つく間もなく米ソ二大強国が原水爆を抱えて睨にらみ合いをはじめました。冷戦時代です。その間われわれ日本人はアメリカのごきげんをとりながらせっせと稼いで、たちまち栄養失調を脱し、痛風や糖尿病を起こすほど豊かになりました。チョコレート一枚で立派な紳士や淑女が、ヤンキーの下等なGーにあいそ笑いをしなければならなかった終戦直後の時代を思う

と、テレビに毎日チョコレートのCMが大々的に現われ、道を歩く五歳の子が分厚い板チョコで口のまわりをクワンクワンにしているのが、あまり珍らしく感じられない。今日の物資の豊富さに今更ながら驚くばかりです。全くこの冷戦時代の二十年間はわれわれ日本人にとっては、あらゆる便利と快適を満載した宝船の到着したような時代でした。この宝船の船長さんは恵比須さんと大黒さんでした。仮の名は池田隼人さん、佐藤栄作さんと言います。

福の神は本来楽天家です。原水爆などという物騒な物の正体は何であるかなど、むずかしいことは考えない夕チで、多分そんな物のあることさえ失念していたのでし

よう。面白いほど積荷が豊富になるのが嬉しくて、部下の舟子たちを督励して益々快適物資を積み上げてきました。

そうしているうちに、冷戦に疲れてきた超大国はこの辺でひと息つきたくなったのでしよう。数年前から急に今までの憎まれ口の叩き合いや脅し合いを慎しむような様子が見えはじめました。わが宝船の船長さんや舟子たちは、そんなこととは無関係に、只管ひたすら稼かせぎにつづきました。

ところが、誰かがフト気がついてみるとこの船の中の空気は濁って息苦しくなり、船底からは毒液がにじみ出し物資の動揺につれ人間がおちおち坐ってもいられない、まことに居心地のわるい状態にな

っていました。乗組員の中の学者が素速く計算してみると、このままの調子で積荷をふやして行ったら、もう二十年か三十年でこの船には人間の居場所がなくなるだろう、ということがわかりました。

便利・快適でニコニコしているうちにいつのまにか環境の汚染が進み、呼吸が苦しくなってきたのです。つまり産業公害ということに気づいたわけです。

さあどうにかしなければならぬ、と慌てているうちに外の様子が激変しました。今まで掴み合いを始めるかと思われるほど敵対視していた米ソが親密になり、ソ連と仲の悪い中国をハラハラさせましたが、ここで米は大きな奇手を打ちました。米が行きがかりの面

目を一擲いつてきしてニコソン大統領を毛首席の元に送ったのです。

こうして世界の勢力分布図は一挙に変えられました。二極が三極になったと言われますが、事実はそのような明瞭な形ではなく、更に四極・五極という多極化に向かったのだと言ふ人もあります。

この変動に伴って日本は、「何もしない主義」の佐藤船長から、「決意と断行」の田中角栄船長に交代しました。そして田中船長は大意で毛大人に参詣してパンダさまを頂戴仕り、意気揚々と帰ってきました。

われわれ日本国民は七年間も「何もしない主義」の下でウンザリしていたところなので、ともかく「何かをやる」主義の田中さんが出て

くれたことを心から歓迎しました。そして何をやってくれるかと目を大きく開いてみつめている国民の前に示されたのが「日本列島改造論」です。その構想の是非は、べつとして、これを拝見した国民は田

中氏が土木屋さんだったことを改めて思い起こしました。そして佐藤さんから田中さんに代わって国民が先ず肌身にこたえたことは、公害の上に更に地価の暴騰とそれに煽あおられた物価の急上昇つまりインフレーションの不快な臭気です。

野党の福祉強化の要求に対して、田中内閣は「経済成長、産業増強なくして福祉ができませんか。そんな大きな福祉の費用をどこから調達するのです」とやりかえし、ある程度の公害は容認さるべきだと

言外に主張しています。この暴論に對して堂々と反論できる野党が一つもないということはまことに情けないことです。

さて長々と世の移り変わりを回顧してきました。その時の流れの大きなうねりの中には、中・小・極小、微細と無数のいろいろな流れが含まれています。われわれ一人一人の毛筋ほどの幽かすかな流れも、それら各級の流れにからんだり、いろいろな力を受けながらその中にあります。

これは客観的にみましたがたですが、主観的には必ずしもこのようには感ぜず、却って自分一個の運命の様相が大きく、明瞭に映じ、世の中の大小の変化は遠くに霞んで見えます。殊に国際情勢の変化

などは、よその世界の出来事をピント外れのテレビか何かで見るとうな感しで受け取っているのが普通かもしれません。

しかし感じ方はいづれにしても、われわれ個人の運命が全体の流れによって大きく支配されるという事実は認めなければなりません。

一九五〇年代から六〇年代へ、六〇年代から七〇年代へと人類の文明の様相と歴史の流れの様相の変化の激しさは、年と共に増してきています。それにつれて日本国内の社会情勢も急激に変わってきました。そして、それとこれと、どちらが因で、どちらが果であるかは遽にやかに断ずることはできませんが、人々の価値観が急激に多様化してきました。男も女もその服

装まの区ま々なこと、どんな恰好を
していても誰も気にとめない、ミニスカートにネンネコで赤ん坊をおぶって駅前を歩いている若い女の子を見て、「あれは何の判じものだろうか」と首をかしげるのは明治生まれのわれわれだけで、一般の人は見向きもしない。こういうところに多様化に慣れた人々の感覚が見られるのでしよう。

ともかく、世は激動しています。七十二年より七十三年は一層激しくなるでしょう。それと共に昔から守られてきた定型化された観念はすべてモミクチャになって壊されてしまします。その中で人々は益々右往左往することでしょう。

しかしこれはまことに望ましい現象だと思えます。

人類はこれまでの方向を大きく変えなければならぬ。それでなければ自滅するより他はない、その行き詰まりに差しかかったので、ここで路線を変えなければなりません。その大転換のために激動期を経なければならぬのは当然です。ですからこの激動は歓迎すべきことだと言えらるると思います。

それはそうだとしても、われわれはただ自分をとりまく大中小の流れのままに押し流されていけばいいのでしょうか、それより他に生きる道はないのでしょうか。

私はこの複雑な流れの中で、どのような力が加えられても、自分自身の志向する方向は失わないで行きたいと思います。地軸がいとも北極星を指しているように、

龕燈かんととうのローソクがどんなに振り廻わされてもいつもまっ直ぐ上を向いて光を発っているように、自分の方向だけは見失わないで生きたいと思います。そのような一人の生き方が大きな流れの方向の決定にも全く無意味だとは思わないのです。

激動する大きなうねりの中に没しながらも私は一つの方向——ケチなことを言わずにみんなで仲よく助け合って生きよう、という方向へ、いつも自分の姿勢を真正面に向けていたいと願っています。

この願いは五十年來変わらなく、きつづけていますが、修行の足りない自分はどんな時でもその姿勢を崩さずにいるということは至難の業なのです。自分一人の生活な

らばそれでもできないことではないような気がしますが、必ずしも同じ念願に生きようと決定しているとは言えない家族その他の人々との調和を気にして、いつの間にか自分の姿勢をあいまいにしていることが多いのです。

私は近年毎年正月には富士山を見に行きます。これは姿勢を正しに行くのです。

霊峰富士と言いますが、本当に霊峰です。関東に生まれ殆ど関東で生きてきた私は物心ついてから常に富士山を見て暮らしてきました。遠くからも近くからも、またあらゆる角度からも眺めてきました。しかし真実の霊峰の全貌を得ようと思ふならば御殿場の近くの仏舎利塔の前に立つのが最もよい

と思います。私は正月のよく晴れ上がった早朝、箱根の乙女峠を越えて行きます。そして、氷のような風に吹かれ歯をガタガタさせながら、不二の霊峰に向かいます。

広い広い裾野から自然に、なめらかに天空に向かって勢よくそそり立つ、あのゴマカシの微塵もない姿に接するとき、自分のゴマカシがきれいに拭い去られるのを覚えます。

不二の霊なるものは人の話では通じません。実物に接するより他、その靈氣に打たれる道はないようです。私はお正月にはその靈氣に打たれに行きます。やはりこれは参詣ということになるのでしょう。そうすると私は霊峰不二を信仰していることになりました。我ながら

奇妙なものを信仰するものだと思えますが、腹力の乏しい凡人が激動の時代に処してわが姿勢を正すのには、不二の靈氣によるより他はないような気がするのです。

まみず討論会

“国家エゴイズムを 超えて”の問題点

—— 人生派と社会派 ——

出席者

和田重正 増田正雄

市来政連 篠崎隆明

富永貞三 (発言順)

司会 こんど、和田同人の『国家

エゴイズムを超えて』という、

人類の未来の運命を左右する重大な提唱が、本になって出来ました。今日は、この本を中心に

お話しいたいと思います。

まず、和田さん、ご本をまとめられた感想から……

『国家エゴイズムを超えて』

をまとめて

和田 この本は、普通こういう問題を扱った本と大分内容が違うなと、お感じになると思っています。

どういうふうに違うかと云いますと、普通こういう問題をあつかうのに使われるような資料が何にもあげてない——ということ、普通

こういう問題を扱う時には、いろんな資料を集めて、それによって裏付けしながら一つの筋の通った理論にする——と、そういうった仕組みになっていきますけど、この本はそういうことがほとんど何にもないではないかと、何かしらたよりにないなあという感がなされるだろうと思うのです。

それは、どうしてそういう事になったかといいますと、私は大体が、こういう問題についてこれまで何にも考えていなかったわけで、全くのずぶの素人で、もし人間を分けて人生派と社会派の二種類あるとすると、私は十六歳位からずっと人生派の最も人生派的な生活をやってきて「自分とは何だろう」「一体どう生きていくのが本

当なのか」「どういう所に肚を据えて生きていきうるものなのか……」そんなことばかりずっと追求してやってきましたもんですから……
尤も^{もつと}も中学時代に社会主義というものが急激に現われてきた時代がありました。その時夢中で頭を突込んで行こうとしたことがありました。しかしこれは本当に子供の時のことで、多少大人らしくなってから今日まで殆ど、自分というものだけを問題にして、本当に、世界のことだとか、人類のことだとか、国家のことだとか、殆ど関心が持てなかったわけなんです。
ただ、戦争を経験したために競争の中で国家というものを「一人はこういうふうに感じているんだろうなあ」「自分は一体どう感じ

ているのかなあ」と非常に疑問に思ってしまったけど、しかしそれをどこまでも追求してみようという熱意はなかった。国家とか人類とか一見大きく見えるような問題については強い関心を持てなかったのです。

ところが、日本が原爆でやられて、原爆とか水爆とかいうものの威力がだんだんわかってくるにつれて、これは大変なことなんだなあ、人類がこれでフツ飛んでしまいかもしれない——今迄どんな大きな事件があったにしても、人類を一まとめにして、フツ飛ばしてしまうという、そういうふうな危険に会ったということとは、まあなかったわけです。

一つだけ私の記憶にあるところ

では、ハレー彗星が出たときに、我々はそういうことは知らなかったのですけど、偉い学者の間では、ハレー彗星と地球とがどうもぶつつかるらしいということ、ぶつつかつたら地球はフツ飛ぶというか、ガスになっちまうんではないかというような、そんな話がアメリカ辺りの一部ではあったらしいのですけれど、我々はそれを知らなかった。知っている人にとって、これは地球が、人類どころか地球そのものが無くなってしまふんだという、そういう危険を感じるようなことだったらしいんです。それ以外には地球が無くなっちまうしそういうふうな大きな不安をもつようなことは無かったわけです。

ところが原水爆なんていうものが出来て、これは本当に人類がフツ飛んでしまいかもしれないというようなことをだんだん知って行くにしたがって、これは一体どういうことなのかなあと、人間にどうして一体こういう問題はどういう意味を持っているのかなあとというようなことを何となく考えるようになった。

その時キューバでもって、ソ連とアメリカが対立し、ソ連がキューバにニューヨークやワシントンに向けて直接に攻撃を加えうる弾道弾の発射装置を装備した、それをアメリカが取り除け、取り除かなければこっちは実力でやるという封鎖をした。その封鎖をソ連が実力でぶち破っていくとなった

時には。いっぺんに原爆戦争がおこる……で、どうなるかというところで、アメリカの方がその封鎖を強行する——それを目がけて沢山のソ連船が向かって行ったわけです。もしそこを強行突破することになったらいっぺんに爆発するだろう、というんで、やり始めたら三十分間か一時間の間に人類は絶滅するような状態になる——それで、およそ、その事を知っている人は皆本当に顔色を失う状態になったのです。その時に、私に、ほっとこうという考えが浮かんだ。こういう考えが浮かんだというのはおかしい話なんです、どうしてなのか自分でもよくわからないけれども、今ここに書かれているようなことが一まとめになって、い

っぺんに全部出て来たんで、順繰り順繰りに理屈を考えていったらだんだんこういうふうなことになるって来た——ということではなくて、パッと一まとめにして、こういう考えが出て来た。

「おかしいなあ！自分みたいな人間が、こういうことについて何にも専門的に考えたことがない、勉強したこともない、こんな一介の庶民がこんなことを考えたって意味はないなあ、どうせ、夢みたいなことなんだろう」と思ったんで、そのまま黙っていたんですけど一年だか二年だか、黙っていたんで、そのうち消えるだろうと思っていたが、どうしてもその考えが消えなくて、逆に、それが自分の中でだんだんはつきりしてくるので、

こういうことを黙っているというのは何か、誰に対してか知らないけれども、どこかに義務を果たさないと、誰かやっぱり一応言わなくちゃいけないのかなあ——というようなことを考え、どうしように我慢できなくなつて、騰写版刷の小さなパンフレットを沢山つくりました。そしてそれを知り合いの人々に出来るだけ読んでもらおうと思つてばらまいた。そしてその反響を待っていたんです。

どういふふうに思っていたかというところ、「自分の考えは全く素晴らしくいい考えた」と思っているわけです。もし心ある人が読んだら皆「本当にそうだ。私もそう思ってた」「私もそう思ってた」と日本

中から一ぱい賛成者が出て来て、こういう方向にどん／＼話はずんでいくだろう。自分みたいな無知な人間が考えたことは、あんなに筋がどうせ言えないんで、そのうちに、そのあら筋に共鳴してくれる人があつて、部分々々にいろ／＼な経験や知識のある人達が、だんだんに動いていくための大きな力が出てくるんじゃないかなあ——実は半分そう思つてたわけですよ。もう半分は、どうにもならない、まる／＼馬鹿げた話なんだなあと思つてた。

ところが、出してみると、何にも反響がないんです。そして読んでくれた人に感想を聞いてみると、それは結構だけれども、そういうことは現実的でない。要するに夢

みたいな空想みたいなことだ。可能性がないと思うという感想が大部分なんです。どうしてかというと、いろいろ理由はあるんですが「個人のエゴイズムを放棄することさえ出来ないのに、国家のエゴイズムをどうやって放棄するか」ということらしいですね。自分自身考えてみても、自分自身になるほどエゴイズムというものは、まことに結構なものじゃないんだと知っていても、やっぱりそのエゴイズムから脱却するということが出来ないでいる。そういう経験から考えてみて、こういう話というものには結構なんだけれどもそうはいかないだろう——というのが大体の人の意見でした。

ところが、その当時に来た手紙

が二十通位ありますが、これは非常に賛成してくれた人の手紙なんです。賛成してくれた人の手紙の八〇九割くらいの方が、面白いことに日蓮宗の人なのです。中には——これは非常に有名な方ですが——大きい字で墨で長い手紙に「大いに結構だ大いにやれ」とあります。それをよくよく読んでみると私が云おうとしていることとまるで見当が違う賛成なんです。賛成は有難いが、ちゃんと理解してくれてないみたいな話ばかりなんです。よく読んでみようと思ってくれた人がない、本当によく読んでみようと思ってくれた人は、その時はなかった。

それから後になって「まみず新書」を出すことになった時、もう

一ぺん活字にして、もう少し広い範囲に読んでもらおうかなあと考えまして『みんな国に理想を』という小さなパンフレットを出したのです。それが今から四・五年前です。最初に書いた時と殆ど何にも変わらないものを出したんです。今度は少しは賛成とかあるいは意見を、大雑把なものではなくて、中身についてのいろいろな意見を聞かせていただいた人もあったんです。

そうやっている中に、それを本当に読んで下さる人が一人二人出て来て、今日まで、二・三十人かせいぜい四・五十人かという程度になって来ているわけなんです。

そういうわけで出来た本なんですから、私は大体こういう問題に

ついで、世の中でどんな意見があるのか、どういふ学説があるのか、こういうことに関連のある事実が歴史的にあるのかというようなことも何にも知らないで、ただ自分の心に浮かんで来たことを書いただけですから、もつとこれをよく確かめてみたい。この考えにどうか、致命的な欠陥があるんじゃないかなあと思つて、この四・五年間、それを確かめるために色々若い人達によく読んでもらつたり、あるいはいろんな意見を出してもらつたりして来た。

今迄のところでは、そう致命的なものというものは発見されない。やっぱりこの方向に向かつて、更に説得力のある何かを付け加えてゆくとか——いふようなことをし

て行くうちに、何かもつと素晴しいいろいろな考えが加えられて来るんじゃないかと思ひます。そういうわけで皆でこういうことに関連のある考えが今迄の世の中にどんなものが出てゐるかということを一先懸命勉強しようということになつていろいろ目にふれるものを集めてゐるわけです。(われわれはこれをネホサ学校と云つています) そうすると最近になつて非常に近い考えを出してゐる方があるといふことがわかつて来ました。

それは毎日新聞の懸賞論文で、その懸賞に入選した人で佐橋さんという通産次官をやつた方が書いてゐる「日本への直言」といふ本、その中に書かれてある考えといふのは、私なんかのこつこつ考えと

非常に近い考えが又非常に似たような言葉まで使つて書いておられる。それからもう一つ、これは世界中に広まつてゐる世界連邦の思想、この世界連邦といふものについて私は殆ど何も知らなかつた。そういうものがあるということだけを新聞で知つてゐる程度でした。

私は大体が「○○運動」といふようなことには全く興味のない人間で、自分ではどうもやりたくないけれど、だげどやっぱりやってみる必要があるぞといふ気がして、近頃若い人達で、これを徹底的に検討してみようじゃないかということになつたものですから、ネホサの事務局に集まつて勉強会をしてゐるわけなんです。その勉強会は、主な点といふのは何かといひ

ますと、この本に書かれてある政策的なことというのは、これは我々素人にはわからない。ただ、原理的にこういうふうになるべきではないか、そしてそういう可能性があるのではないか、というようなことを我々は云いうるだけで、むしろ今我々はこの考えは一体どこから出て来ているのか、その根本のところ、一言でいえば、自身自身の人間観、世界観とか、そういうものが出て来る個人の体験、そういうものが元になって、その立場で眺めてみたときに世界の有様、あるいは国家というものの姿が、こんなふうに見えて来たということ——これだけのことです。皆に勉強してもらっている一番の中心のところは、これが出てくる

中心のもの、基は何かというようなことについて聞いてもらっているわけなんです。以上この本が来たいききつを話しました。

討 論

司会 『国家エゴイズムを超えて』の提唱に賛成した若い人たちがネホサという会をつくって、いろいろ活動をしていらっしやるようですが、どんなことをされているんですか。

増田 今までのところ、主に勉強会なんです。より深く、この提唱を理解するのが先決だということ。

司会 どんな問題が出てきましたか。

増田 昨日の会で出てきた問題は欲望のあり方と関連されて国家エゴイズムの形成ということが話しあわれたんです。これは今まで余り気づかなかったことです。

司会 具体的に言いますと？

増田 欲望の内容と方向を分析的に考えると、食欲とか性欲とかいった物質的欲望を満足させるために知能を生み出してゆく方向と、集団を作ってお互いの個を維持してゆくための集団欲を充足発展させるために情緒・情性というものを生みだしてゆく。この二つの方向があるんではないか。今日の文明のゆきづまりは、前者の欲望とその方向のみが強くなって、後者が省みられなかったためではないか——大

ざっぱに言うと、こんなことが話しあわれたんです。

司会 面白いですね。市来さん、

このご本を読まれたご感想を聞かして下さい。

市来 私、いつも考えていることなんですけど、国家というものは、その成立の過程から考えて、一つの権力機構なんですから、国家のエゴイズムというのは、支配者のエゴイズムであるわけで、国家エゴイズムを変えてゆくには、支配階級の機構そのものを変えてゆかなければならないわけだと思っんです。この本に書かれているように国民の一人一人が、理想を掲げてゆくこと、そのことは勿論賛成なんです。それがただで、この権力機構

を変えてゆくことが果たしてできるであろうか？

ご本の中に、二、三百万人の同調者があれば……と書かれています。ですが、実際今の日本の共産党は、黨員が三十万いると言われ、選挙では三百万の票を、同調者をもっているのに、どうにもならないのです。それをネホサだと可能だというお話になると疑問を感じるのです。ご提唱そのもの、目標はそうではなくてはならないと思ひながら、実現の方法について疑問を感じているものです。

司会 その点、和田さんはどうお考えになりますか。

和田 数字の話は、一寸別にして、権力機構を変えてゆく、その変

えてゆく力について、私はこんな風に思うのです。変えてゆく力にはいろいろな角度からの働きがあると思うんです。ネホサは、自分たちの政党をつくらせてネホサ内閣をつくらうなどと考えているのではないんです。ネホサのような考えと、同じ方向に努力している人たちと一緒に流し、より大きな流れを作り、その中の一つの力として働きたいと願っているのです。

いろんな角度と言いましたけれど、一つには、社会派（人間を人生派的タイプと社会派的タイプとの二つに分けて）の人たちの行動だけではうまくいかない部分が多いのではないかと。今日

の社会改造の運動には、わりあい慎重な考えで行動をする人生派の人たちが動員されていないということがあるんです。そういう人生派の人たちも共鳴し、参加しうる仕組が必要なんではないか。ネホサはそういう角度をもっているのではないか、と思っています。

市来 国家エゴイズムを本当に解消できた時には、どんな国際機構を描いておられるんでしょうか。

和田 どんな形がよく分かりませんが、世界連邦というようなものになってゆくんではないかなーと思います。

篠崎 国家エゴイズムを克服できるような偉大な人格者が、政治

をとらなければならぬということを考えておられるんですか。

和田 ネホサの考えは、なまやさしい考えなのです。どうしてかという強力に何かを打ち破つていこうとか、カとカとの戦いに勝つてやろう、国家を無くしてやろうーそんな考えはないのです。そういうことを考えている人は沢山あるし、そういう人たちの力も一つの力として考えてはいるけれども……。しかし、こういう「なまやさしい行き方」も、他の力とかみあって、ある一つの方向をつくってゆけるんではないかと思っっているんです。

市来 先ほどの感想に補足して、私は、国家権力機構というもの

が、国民を欺瞞して、国家エゴイズムを押しすすめているのであって、庶民の一人一人は、戦争はしたくないのに、国のためだと思わされて、戦場にゆくんで、私なんか、その一人なんです。

司会 ネホサの運動というのは、国家エゴイズムという迷信——国家にとって、エゴイズムは必要悪なんだという迷信をとり払う運動とも言えるんじゃないですか。

和田 そうですね。より端的には、国家エゴイズムがあったら人類はおしまいなんだということを知らしてもらいたい——これが出发点です。

篠崎 国家エゴイズムをのりこえるには、どうしたらいいのでし

ようね。急所はどこでしょうか。

和田 さっき、増田君が言っていたように、集団本能がうすれてきて、エゴイステイックな欲望の満足を求めて知能が発達してきたことに問題がある——これはね、考えてみると、やはり世の中の仕事、そこから出てきた家庭のあり方に、集団本能——石原登さんの言葉では「情性」ですね——を満足させない原因があると思うんですね。今日の家庭ではね、実際に、お母さんたちと話してみると、「物をたくさん与えて、うまいものを食べさせ、いいおもちゃやいい本だの……何しろそんなものを与えることで子どもが幸福になると思いいこんでいる人が一杯です。

これは全く罪悪的なことなんですね、親と子の間で物をはさんで交渉している、心と心が直にこよわせる機会が少なくなっている……ことに近頃は、食うのに困るわけでもないのに働ぎに出ているお母さんが多い。そして、母と子どもとの心と心がピツタリする機会をもつということがいかに大切かということをお忘れしてしまつて——別に時間の長さが問題ではないのですから、一日のうち五分間でも、話しあふ、気持ちを通わせる機会をもてばいいのだが、それを物で代えてしまつていますね、ところが集団本能というのは、物では満足しない、物で満足させるという錯覚は、一般的な現象ですね。

司会 集団本能の満足は物では代え得ない、ということは大切なことですね、われわれでもついそう思つてしまふ。そういう錯覚はどうして出てきたのでしょうか。

和田 端的には、高度成長とか産業の発展とか、食えない時代はそうするしかしょうがなかったが、食えるようになっても未だ所得倍増を進めて、その方向に国民の幸福があると思わせ、今日になつても尚続けている。

富永 先ほど和田先生がエメリー・リブスの『平和の解剖』を読まれたと話されましたが、私も十五、六年ほど前に読んで感動して、世界政府運動の片棒をかっついで、少しワッショイワッシ

ヨイという形で動いたことがあるんです。ところが中に入ってみ、その世界政府運動というのが、また幾派にも分かれて、勢力争いをやっているんで驚いちゃったのですけど……。そういう状態の運動の中でも、社会派の人たちは大きな意義を感じるのでしょうか、私のように人生活派にとっては、何か空虚な感じがして来て、その運動をする前に、私自身の問題、私の中にあるあらゆる差別という問題をどうして日常生活の中で解いてゆくかということが大きな主題となる——世の中のいろいろな相克の原因となるべきものを、人間の原点においてとらえ、それを自分の生活の中で解消して

いく方向に生きることが、そういう問題なり運動への切実な参加の仕方ではないか、パンフレットを配ったり何かやっていることが空しくなって世界政府運動から離れてしまったんです。

このことは、教員組合運動でもこの頃よくある。基地反対運動についても私が本心から肯けない原因なんです、さき程和田先生が、社会派的な動き方だけでは片手落ちではないか……と話されましたが、本当に肯けたのです。

司会 ネホサの提唱が、深い人間理解に立っているということが人生派の人たちも又、参加するという条件をもっているのですね。

富永 それから、私は、国家というものは、何か自然発生的に出てきたもののように思うのです。そして、人間が高度に生存を拡張し、展開していくために、ある重要な役割りを果たしてきましたし、国民は、自分の生存とか利益とか幸福というものを国家によって守られていることを信じ、自分の国が発展することは、自分の為にも必要だと教えられ、そつだと受けとってきた。

ところが、現代の段階まで達したときに果たして国家は、これまでと同様な意味や働きをもちうるだろうか？ 実是一个の大きな転回期にさしかかっているのではないかと、世界政府運動にたずさわり始めたころか

ら考えているのです。国家の機能が、人類の現段階ではもう邪魔になりはじめた状況がよく見えない為に、今日のいろんな矛盾が出てきているのではないかし、ネホサはそれを明きらかにし、広く啓蒙する役割りを担っているのだと思います。

司会 核とか公害というのは、その象徴なんですね。

富永 私が教育という仕事をやっていて痛切に思いますことは、先ほども和田先生が指摘された国家理想という問題です。日本は敗戦後、本当には理想を掲げてこなかったのではないかし、このことは一種の不思議です。教える人たちが、企業に入って一先懸命にやるのが本当に人

類のためになっているのかとても疑問だというわけですね。会社のエゴイズムに奉仕しているだけではないかと言つのですね。国家の場合も同じで、国民は人間として生きることを疎外されていると思つんですね。

司会 そついう意味でも、国家は、すでに人間から離れて、昔のような機能や意味を失って過去の遺物化しつつかあるのでしょね。

富永 エゴイズムの問題ですけど、僕ら自身、エゴイズムは克服されるべきものだけれど、容認される値打ちのあるものだし、ということが根深くあるように思いますが。道徳的には克服されるべきだと思つていても、自分を心底つきつめると、エゴイズムは必

要なんだという気持ちか、みんなにあるんじゃないですか。

司会 国家についてはそれがオープンに認められてきたんですね。

富永 それか、和田先生も指摘されているように原水爆ができて人類が自滅できるような力をもつようになり、重化学工業が発達してそのための廃棄物が公害を起こし、自然の浄化力を上廻つて慢性的に人間を自滅さすということになると、エゴイズムにのつかつて、拡張・拡大の方向に進んでいく方向のみが、人間の進歩ではないことが分かってきた、遠い昔に、非常に鋭い直感力をもつた聖人が、エゴイズムというものは人間を栄えさせるものではなくて、それこそ

人間を滅すものだ」と指摘されたことが、現在は、科学的客観的理解しうる時点にさしかかっているということなんですね。

あらゆる意味で、エゴイズムを原理にして計画し行動することは、全部、生命の自滅につながるということを確認する——それは国家だけにかぎりませんが——ことが、ネホサの運動の中心に指摘されていることじゃないか、と私は考えます。

市来 いま富永さんのおっしゃったことには全面的に賛成です。方法論について先ほど若干の疑問を提出しましたが、この提唱の「国家エゴイズム」を超えるという考えは、非常にハッキリしていると思っんです。

昭和二十五年ごろの雑誌『世界』に「原爆が出現したことによって、人類は、今までの民族意識から人類意識に変わらなければならぬ」と書いてありました。和田先生の提唱は正に、今日の人類の歴史的段階に応ずる人類意識に立った提唱だと思います。

富永 それから、この提唱の運動原理の中心に「世界の福祉に奉仕する」という姿勢が説かれています。

僕は、これは本当に実現したいな—と思うんです。おつかしいことは分かりませんが、もし実現したら、今の日本の青年たちがどんなに素晴しくはばたくことだろう、息をつくことができ

るかその内在的エネルギーをどんなに力強く発揮できるかと思えますね。

司会 私たちが、ネホサの運動に美しい夢を描く、まず第一のことは、そのことです。どうもありがとうございます。



まみず

昭和四十八年
二月号

白い杖
25

目を開くのは誰だろう

目を開くということはまことに手間のかからぬことだ。だが眼を開かせるのは難中の難事である。自分の小さな感情に心が蓋されて大きな世界が見えなくなり、蓋の中の狭い世界で忙しく頑張ったり、フテクサして怠けたりしている。そんな人もフト眼が開けば開けてしまいが、開かなければ開けない。

青少年にも夢がさめたように人が変わったように突然活々とするものがある。何かが眼を開かせたのだろうか、それとも自分で開いたのだろうか。親や教師は、そのどっちでもないことを知らなければならぬ。そこにこそ指導者の祈りがある。努力工夫もあるのだ。

やま
2

自然をみつつけよう

和田 重正

小田原はじめ塾

われわれ人間は自然の一部ですから自然を離れてはわれわれの身の健全はあり得ません。ところが文明人の肉体は、自然を造り変えた人工の中で生活し、意識は常に文明文化に焦点が合わされていて身心共に自然から殆んど離れて生活しています。これは大へんなことだと思いません。気狂は自分が気狂だと気がつかないのが特徴だと言いますから。

話変わって、ここ数年来われわれの山の寮では暮の二十八日には来合わせた人たちが餅つきをする習慣ができています。せんだつても賑やかにやりました。前の晩からあんこの小豆を煮る者、餅米をとぐ者、当日の朝早く近くの傾坂地にモチグサを摘む者も四、五人おります。いよいよ取りかかる段になると少年は薪を割り、少女はかまどを燃やし、力自慢の若者はキネを振り上げ、これに呼吸を合わせて手がえしをする若い娘さんの真剣な顔。——こうして出来上がった餅のうまさは、毎年のことながら、喉を通すには惜しいほどです。何の味だろう。

私は新鮮な大根おろしをつけた餅の塊を頬張りながら思いました。

「自然の味だ。自然の循環の中の味だ」と。

「バカを言え。餅が自然であるはずはない。人間が作った人工品ではないか」と反発が来るでしょう。なるほどそうですね。理屈はそうですね。だが私は、年の暮に若者たちが臼と杵でこうして搗いた餅は、年中スーパーで売られているライス・ケーキなる餅より遙かにより自然であるという気がするのです。自然の循環の中のものように思えるのです。餅という形に限られ、自然の循環から切り離された物質の一片には盛り切れない、豊かで深い味がこの手作り餅には秘められているのです。

年中花屋の店頭を賑わしている菊も菊には違いないが、十一月三

日に咲く菊こそ本当の菊です。これも人工だと言えば人工だが、自然の循環から大きくはみ出してはいないのでその味には底深さがあります。むろん味の強さから言えば山に咲き乱れる野生のリユウノウギクの比ではありませんけど。こんなことを言っているのはキリがありませんが、ともかくわれわれは本当の自然に出会う機会がめつたになくなりました。

いつか東京へ行ったとき、東京には雲さえも自然の雲がないことに気がついて驚きました。東京には自然の光を放つ星がめつたに現われたいことは承知していましたが、雲までも自然のすがたを失っていることを知って、よくこんなところに人は生きていられるもの

だと感嘆したものです。上は天皇皇后両陛下から総理大臣以下各省大臣諸公はじめ小学児童や幼稚園児に至るまでこの脱自然の中で棲息していると思うと気の毒を通り越して恐ろしくなります。自然を離れて身心の健全はない、という原則を思い起こすと、日本のすべての中枢である東京のこの無自然は恐ろしい気がするのです。ここで企画される政治も産業も教育も気狂いじみているのがわかるような気さきえいたします。

でも振り返って地方の実物をあらためて見直してみると、地方都市はもちろんいわゆる農村地帯の人々の生活さきえ東京のそれと五十歩百歩の違いにすぎないことが知られます。客観的な環境にはかな

りな開きはあってもそこに住む人々の意識の点ではあまり違わないのではないかと思えます。テレビ・ラジオ・新聞雑誌による洗脳の結果でもあるでしょうが、そればかりとは言えません。人工の物は刺激が強く自然の物より人の目を引きやすいのが道理です。だから農道を歩いている農民の目に入るものはあたりの自然ではなく、自分の田畑と他人の田畑の金になる作物であり、農道の舗装の工合であり、行き交う自動車や耕耘機です。大地さきえも坪何万円かのお金に見えてしまいます。

こうみてくると近頃は都会人も農村人も日本人はみんな脱自然の生活を営んでいるような気がしてきます。

人間の精神を形成する大事な時期にある子どもたちはどうでしょう。小学校から中学、そのもつと前の幼稚園で、自然に目を向けさせ、自然を意識させる努力がどれだけされているでしょうか。そこでは教育とは人間の意識を自然から遠ざける仕事だと思われているのではないのでしょうか。自然を離れて健全な身心はない、という原則がかなり思い切ってそこでは無視されているではありませんか。家庭の中も会社も役所も学校も公園も鉄道沿線までも徹底的に人工化され、外へ出れば開発ブームで遠い遠い僻地の山の中まで機械のうなりが自然を制圧しています。この現実の環境の中で自然によって身心を養うことが可能なのだから

うか、と疑いたくありません。

身の方は殊に都会人が自然によって健全を保持するのはなかなかむずかしいことだと思います。しかし人々はだんだんこのことに気を配るようになり、自然食を求めたり、交通機関の発達を利用して山や海に遊んだりすることが多くなりました。

では心の方はどうでしょう。自然を発見し大きな深い感動を覚えることによってわれわの心は、いのちの海とでも言うような大自然につながり、大自然のように健全になるのです。そのような経験をする機会がこの汚染と破壊の進んだ日本列島の上で得られるだろうか、と疑う人があるかも知れませんか。しかしその方の心配はまだあ

りません。

自然は大規模なところにだけあるのではないのです。去年の十二月号の本誌の表紙を見て下さい。

あれは一枚の落葉です。でもあの落葉は大自然から切り離された一ひらの物質ではありません。よく見て下さい。あの一枚の落葉には自然の循環の中のひと時の仮のすがたが描かれているのです。あ一枚の落葉の背後には大自然があつて、この一枚のすがたを支えているのです。あれを描いて下さった方はどう思ってお描きになったのか知りません。しかし私は一見したときにさう感じたのです。無限永遠の中の果かない落葉のすがたを私は温かい、しかし哀しい感動を以って眺めたのです。

この一枚の落葉の絵によって、

そこに自然を感じさせられた人は、道端の落葉の実物と同じ自然を発見されるでしょう。

大洋の一滴の味は大洋の味です。枯葉一枚、すみれ一輪の中にも大自然は惜し気なくその全貌を現わしています。——こんなことを言う人と人は欲を出して、枯葉やすみに焦点を合わさず、背後の大自然を見ようとあせるかも知れませんが、そうなるといけないから上のことばは取消します。ともかく余計な欲を出さずにわが心の目を信頼して、ただ何心なく見させれば、そこに自然はあるのです。

何故私はこのような余計なことを言っているのかというと、世の中の住心地が最近急激に悪くなっ

てきたと思うのです。それは政治も悪い、教育もひどい、いろいろ原因はありますが、われわれが日々肌で感ずるのは若い人々が益々薄っぺらで、ケチ臭く、冷たくなってきたということです。つまり心が大人不健全になってきたということです。このまま行ったら世の中はどんなに浅ましいことになるかと思うと、今のうちになんとかせねばならない気がするのです。それには人間が自然によって豊かな温かい心を取り戻すのが一つの有効な道だと思っております。そして少し遠回りのようですが、まだあまり心が固まらない中学生以下の子どもたちに自然を見る目を開かせたい。それは子ども一人一人にとっても絶対しあわせの道で

ありますが、その子が大人になる頃には世の中もずっと住みよくなるに違いないと思っております。

しかし、子どもに「そうなれ」と説教しても無駄です。これはどうしてもお母さんやお父さんが子どもの自然を見る目を開いてやる導きをするより他によい方法はありません。

殊に幼い子を持つお母さんは、内職やパートをする暇があったら握り飯を持ち電車賃を使っても野や山へ行つて、今ならせりやふきのとうでも摘み、もう少したったらツクシンボを採つてみて下さい。そしてついでに草木の若芽の伸びるすがたに、小さなイヌフグリの青い花に目をずっと近づけて見つけてください。あらゆる評価や理

屈をすててただ見てください。そこに大自然があるのです。雲の動くさまを、歩きながらでも坐つても、よく見て下さい。

フト足を止めた小さな流れの石の下からサワガニが這い出してきたら、「まあ」と大声をあげて下さい。

でもお母さんが不幸にして自然に感動する感覚をもっていないかったらどうでしょう。

ここが私の言いたいところです。もしお母さんが、子どもを人間らしい人に育てたいと思つたら——子どもを本当にしあわせにしたいなら、お母さんは内職やパートを少しサボつても、自然をみつける努力をしましょう。先にも言つたように自然は大規模なところ

だけにあるのではありません。むしろ野の土手や山道のわきの一メートル四方の中に充満しているのです。そうです。見つけようとさえずればどこにでもあります。

それでもお母さんに自然が見えなかったらどうします。さうしたら、花を見て、虫を見て無理に感嘆してください。子どもは、それでも目を開かれるでしょう。子どもは、幼ければ幼いほど強く、自然を見る目を開こうとしてそのきっかけを待っているのですから。だいたい、子どもは強烈な生の自然に出会うと誰から教えられることなく、それに感応するのが当たり前なのです。

山の合宿所のまわりで、雉や野兎に出会うと、何も気合をかけな

くても子どもらの目は生き生きと輝きます。足元の谷間から朝霧が湧き上がって来ると子どもらは黙ってそれを追っています。

ともかく、子どもらが浅ましい、冷めたい大人にならないで、よい人がらになってくれることを願うならば、お母さんは自ら自然をみつめようと努力し、同時に子どもをなるべく自然の濃いところに放つてやるように工夫すべきだと思います。

人間の心を育てるのに大自然ほど力強い教師はありません。



手書き未定稿



不生靈明

和田重正

「佛心は不生にして靈明なるものに極まりました」

盤珪禪師語録

昭和十七年春のある日、休日を利用して東京から訪ねてくれた親しい大学生が往復の車中で読むつもりで持ってきたものであろう。岩波文庫の薄い一冊を置き忘れていった。寝転んで私は何気なく手

をのばし、床の間のその小冊子を取り上げて表題に気もとめず、自然に開いたところに眼を落とした。

「佛心は不生にして靈明なるものに極まりました…」

えッ？ 極まりました！

一瞬、私の瞳孔は絞りを失ってしまった。耳も鼻も、七つの孔は悉く風の吹き通るにまかせて。

しばしたって表題をあらためてみると『盤珪禪師語録』である。

佛教に魅せられて、或いは念仏に泣き、或いは禪に狂笑して過した十八年の後ようやく人心地を取り戻して、西湘に春をたのしんでいたときである。

「佛心は不生にして靈明なるものに極まりました」と。この一語は目耳鼻の孔につまっていた念佛と

禪のカスを一挙に吹き飛ばしてしまったのである。

ばんけいとはなんという心にく
いおやじだろう。その一語々々は
なんの会釈もなくわが五臓六腑の
すみかくにまで入り込んで、そこ
のこびりついているおりをこそぎ
出してしまふのだ。

「おりふしにひょっと一切事は不
生でととなふ物を、今まで得し
らいで、扱々むだ骨を折ったこ
とかなと思ひ居たで、漸と従前
の非をしつてござるわいの」

——こんなことを涼しい顔で言い
放っておきながら、このおやじは、
私が寝ころんでその語を聴くこと
を許さない。一語、一語と圧力を
増して、私を正坐せしめて攻め立
ててくる。あまりの息苦しさに目

を閉じ耳を塞かんじこうとすれば、莞爾
としておのが身の上ばなしに洪茶
を楽しんでいる始末である。

さて、この時以来私は、このば
んけいさんをわが最も頼もしき先
輩と心得て敬愛してきた。といっ
ても別段語録を暗誦するほどに繰
り返し読んだというわけでもなく、
まして盤珪禪師や不生を研究した
わけでもない。だからおろん盤珪
さんから何か珍しきことを教えら
れたわけではない。ただ、道を一
人行くとき、人と語るとき、夜半
窓外の笹の葉ずれを聞くと、不
生、靈明、一切事が調ふ、などの
片言がふとわが心耳を驚かすこと
があるだけである。

しかし深く省みれば、教育者と
して、「只そだてがわるさに、生ま

れ附の佛心を上上の凡夫にいたし

一切迷ひを見習い、仕習て氣くせに」させ「迷を功者に」させることにのみ憂き身やつしている教育の現状をながめて歎いてばかりも居らず一人炬火を高らかにかけわが道を往くこの力は、極まりましたの一語によって決定されたものであることを告白しないわけにはいかないのである。まことに、迷の功者をいくら功者に仕立てても世の中は調いませぬ、世界の平和もむろん来ませぬ。だから盤珪さんは「皆不生でござれ、一切事がとのひまするわいの」と示しているのである。靈明に極まりましたと保証しているのである。あわてることがはない。

「まみず」に出会ってはお休みします。

後記

『揭示板』の「欠点」で自分の子が他の子に言った意地のわるいことはをきっかけに、先生が自身の欠点を見つめ直すことになった経緯がありのままに書かれています。よく書かれたと思うと同時に甘やかされて育ったわたし自身には重く問いかけられる一文でした。

この号に『国家エゴイズムを超えて』に関する記事が載っていますが、同書自体は絶版になっております。

折しもロシアとウクライナの戦争は一年を越え、Z世代と呼ばれる若い人たちにも、戦争をどう考えたらいいか、という関心が高まっているように感じられます。

『国家エゴイズムを超えて』の補足版である『自覚と平和』（くだけ社）は当会ウェブページで読むことができます。スマホやPCにダウンロードすることもできます。

平澤

和田重正に学ぶ会機関誌『ここに帰る』 第79号
令和5年10月1日 発行
発行者 〒399-3301 長野県下伊那郡松川町上片桐1352
和田重正に学ぶ会 平澤 正義

和田重正に学ぶ会ホームページ <http://wadashigemasa.com/>

和田重正に学ぶ会 会費は年二千円 『ここに帰る』バックナンバー お分けします(有料)
◇◇ 当会活動資金へのご寄付 大歓迎 ◇◇